

シマフクロウの棲む森づくり ～保護管理～

十勝東部森林管理署

水谷 天哉、黒岩 竜大

研究の背景・目的

かつて北海道に広く生息していたシマフクロウ(フクロウ目フクロウ科)について、開発等の影響により急激に個体数が減少し、1970～80年頃には70羽程度まで落ち込んだことを背景に、1993年に環境省と農林水産省が連携して保護増殖事業などの取組を開始しました。また、北海道森林管理局では、シマフクロウに配慮した森林の保護・管理、野生動植物や関係法令の知識がある者による巡視、河川工作物の改良による採餌環境の改善等を指針等に基づき進めてきました。これまでの十勝東部森林管理署で行った保護増殖の取組を振り返るとともに、現状の課題を分析し、今後の取組に向けた方向性について報告します。



研究の内容・成果

シマフクロウを保護するためには、森林施業だけでなく生息環境も考える必要があり、生息環境の整備を目指す取組として、十勝東部森林管理署管内では現在2か所の給餌池を設置しています。

◆給餌池①

平成13年から14年にかけて職員実行で設置しました。設置にあたっては、関係者の意見を聞きながら、温度の高い湧水を活用し、冬季に河川が凍結しない池を整備しています。湧水は水温29℃のアルカリ単純泉であり、冬場の水温は0℃を下回らないことから、凍結やメンテナンスの心配ありません。ただし、単純泉であり水質の問題から生息できる魚類がコイなどに限られます。本来、イワナやカジカが生息する自然な給餌環境という点からすれば改善の余地はありますが、シマフクロウもたびたび訪れており、採餌環境の改善に貢献しています。



職員実行で設置した池

◆給餌池②

平成27年から28年にかけて発注事業によって設置しました。設置にあたっては、有識者に相談しながら、自然に近い採餌環境の場として整備を進めました。設置箇所の条件として、①林道から程よい距離(※約500m程度)②イワナやカジカなどが生息できる環境③冬季に凍結しない、という条件で試掘を行い、夏場の水温が9℃の湧水箇所では給餌池を設置しました。しかし、夏場の水温9℃の池は、冬季に凍結が見られ、その対策として上流の水温7℃の湧水を池に直接パイプで引き込み、凍結防止に成功しました。現在は、冬季に環境省によるヤマメやオショロコマなどの放流事業を行い、採餌環境の改善にご協力いただいています。



自然に近い採餌環境として整備



シマフクロウが魚を捕食する様子

◆給餌に依存しない環境づくり

ポイント①

餌となるコイなどの養殖を手掛ける事業者の撤退等を背景に、シマフクロウの生息環境を整備するために必要な給餌が困難になる可能性があること

ポイント②

より自然に近い環境の中で、シマフクロウが自立して生活することが望ましいこと

上記ポイントを踏まえ、令和元年に実施した保護林内の間伐施業に併せて、周辺環境の整備として、試験的に給餌に依存しない池の設置をしました。冬季に水が凍結しないといわれる水温7℃の湧水箇所を掘り、人工的に深みを作ることで魚が付きやすい環境を整えました。現在でも、冬季に池の凍結は見られません。また、池の設置時に放流したオショロコマが繁殖したことで、自然な採餌環境が維持されています。

湧水箇所の
拡幅工事

冬季の池の様子

今後の展開

より自然に近い採餌環境の整備を目指すとともに、給餌の維持に必要な餌の仕入れが困難になる可能性を見据え、給餌に依存しない新たな池の更なる展開に向けた候補地の選定を検討していきます。